

平成二十五年冬季

全国大学国語国文学会 第一〇八回大会案内・要旨集

期日 十二月七日(土)・八(日)  
会場 宮崎観光ホテル  
後援 宮崎県

平成二十五年冬季

全国大学国語国文学会 **第一〇八回大会案内**

会場 宮崎観光ホテル (JR宮崎駅より車で約5分)

〒八八〇―八五二二 宮崎市松山一―一

電話 〇九八五―二七―二二二

○同封の葉書に出・欠をご記入の上、十一月十五日(金)までに必ず着くようにご返送ください(欠席の場合も必ずご返送をお願いします)。

○十二月七日(土)の、昼食代(一、〇〇〇円/委員のみ)、懇親会費(一般・八、〇〇〇円、大学院生・五、〇〇〇円)、レジユメ資料代(一、〇〇〇円)、十二月八日(日)の昼食代(一、〇〇〇円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/〇一七四〇―四―七三八四六、口座名称/宮崎県立看護大学大館真晴研究室)にて十一月十五日(金)までにお振り込みください。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いします。

〒880―0929 宮崎市まなび野三―五―一

宮崎県立看護大学 大館真晴研究室

Eメール odate@mpu.ac.jp

FAX 〇九八五―五九―七七四六

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒245―8650 横浜市泉区緑園四―五―三

フェリス女学院大学文学部日本文学科竹内研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.ferris2012@gmail.com

FAX 〇四五―三三〇―六〇六七

○十二月八日(日)はマラソン大会が開催されるため、宿泊施設のお手配はお早めをお願い致します。宿泊施設のご案内等につきましては、別紙を御参照ください。

第一日 平成二十五年十二月七日(土) 宮崎観光ホテル

委員会 (11時30分～12時30分) 西館十階 スカイホール

## 大会

受付 12時30分～

開会 13時00分

会場 東館三階 碧耀の間

## 開会の辞

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

犬飼 公之

## 会長挨拶

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

中西 進

## 大会担当校挨拶

宮崎県立看護大学学長

瀬口 千ホ

## 宮崎県副知事挨拶

宮崎県副知事

内田 欽也

## 公開シンポジウム (13時10分～16時00分)

テーマ「日本文学にみる「旅」

## 基調講演 (13時10分～14時10分)

円環の思想―旅について―

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

中西 進

## パネルディスカッション「旅の歌の魅力」 (14時30分～16時00分)

パネリスト

万葉びとの旅は何を発見したか？

國學院大学教授

辰巳 正明

あくがれとしての旅―若山牧水を通して―

宮崎県立図書館名誉館長・歌人

伊藤 一彦

旅の歌

歌人

小島ゆかり

コーディネーター 奈良大学教授

上野 誠

懇親会（16時30分～18時30分）

会場 東館三階 緋耀の間

会費 一般 八、〇〇〇円 大学院生 五、〇〇〇円

第二日 十二月八日（日） 受付開始 8時45分 宮崎観光ホテル

研究発表会 会場 東館三階 碧耀の間

午前の部（9時10分～12時00分）

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

上野 誠

大伴家持の防人歌収集と防人関係長歌の詠出

発表者／國學院大學大学院生

神宮 咲希

司会／香川高等専門学校准教授

東城 敏毅

『日本霊異記』の歌謡

発表者／元國學院大學大学院特別研究生

岩井 護

司会／成城大学教授

山田 直巳

〈休憩〉

『源氏物語』における夕霧の人生儀礼―籠りの空間としての二条東院―

発表者／山口大学大学院生

趙 暁燕

司会／國學院大學非常勤講師

津島 昭宏

内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の注釈内容

発表者／早稲田大学大学院生

カラーヌワット・タリン

司会／慶応義塾大学教授

田坂 憲二

昼食・休憩（12時00分～13時00分）

午後の部（13時00分～15時50分）

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

犬飼 公之

中上健次『奇蹟』―タイチの救済―

発表者／中京大学大学院生

佐藤 綾佳

司会／玉川大学非常勤講師・立教大学兼任講師

山田 夏樹

与謝野晶子「北備溪谷の秋」の旅と岡山―渡辺喜作順正高等学校校長宛書簡他、「旅」と「旅先」にもたらされるもの―

発表者／就実短期大学准教授

加藤美奈子

司会／和洋女子大学教授

木谷喜美枝

〈休憩〉

弘前・秋田・山形所在の往来物資料についての一考察―目的と出版地域による分類からの検討―

発表者／弘前大学教授

郡 千寿子

司会／熊本県立大学教授

半藤 英明

饅頭屋本『節用集』二種の語彙について―畜類門・草木門語彙を中心として―

発表者／駒澤大学教授

萩原 義雄

司会／熊本県立大学教授

半藤 英明

授賞式（15時50分～16時00分）

研究発表奨励賞

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員・宮崎県立看護大学准教授

大館 真晴

平成二十五年冬冬季

全国大学国語国文学会 第一〇八回大会 公開シンポジウム

## 日本文学に見る「旅」

「旅」は日本文学のテーマの一つとして大きな位置を占めており、「旅」の表現には、宗教、文化、芸術などの様々な日本文化の特質が映し出されているといえます。特に歌には、先に述べたような日本文化の特質がよく表れているといえるでしょう。今回の基調講演ならびにシンポジウムでは、記紀万葉から現代に至るまでの様々な「旅」の歌をとりあげ議論を深めることで、日本人にとっての「旅」の魅力というものを、若山牧水を生んだ宮崎の地から発信していきたいと思えます。

### 基調講演

円環の思想―旅について―

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

中西 進

### パネルディスカッション「旅の歌の魅力」

パネリスト

万葉びとの旅は何を発見したか？

國學院大學教授

辰巳 正明

あくがれとしての旅―若山牧水を通して―

宮崎県立図書館名誉館長・歌人

伊藤 一彦

旅の歌

歌人

小島ゆかり

コーディネーター

奈良大学教授

上野 誠

平成二十五年冬、季

全国大学国語国文学会 第一〇八回大会

研究発表会

【研究発表／午前】

大伴家持の防人歌収集と防人関係長歌の詠出

國學院大學大学院生 神宮 咲希

『万葉集』巻二十に収載される天平勝宝七歳の防人歌には、防人やその家族の歌と共に、大伴家持が詠んだ防人関係長歌が三首ある。防人関係長歌三首はいずれも、家族と別れて旅立つ防人たちの悲しみを詠んでおり、これは防人歌の悲しみの心と対応する。そのため先行研究では、この長歌三首は家持が部領使によって提出された防人歌に触発されて詠んだものであるとする理解がある。しかし、長歌二首目の「防人の情と為る」といった形式は、例えば『文選』樂府にある「燕歌行」等に見られる「民衆を管理する者が民衆の立場に代わって詩を詠む」という中国詩の形式を意識していると考えられる。また、中国には漢代以来の採詩の制度がある。家持が防人歌を収集し、さらには防人の心に代わって歌を詠むというのは、『詩経』や樂府に基づくならば民衆の声を聞き、民衆の心に代わるという考えによるものであろう。

何故家持は天平勝宝七歳に防人歌を収集し、防人への悲しみを詠んだのだろうか。そこには家持の政治観が関係しているように思われる。家持は越中国司の時代に、『尚書』の理解に基づいた、君臣

一体の政治を理想とする態度を見せている。しかしこの時天皇は、東大寺の大仏建立に心血を注いでおり、天皇の意識は仏への信仰に中心が置かれていて、天皇に奉仕する臣下には向いていなかった。そうした政治の実態は、家持の理想からほど遠いものだったと言える。

以上のことを踏まえて本発表では、家持による天平勝宝七歳の防人歌収集と防人関係長歌三首の詠出の背後には、周代の政治を理想とした家持による、防人の悲しみの理解があったと考える。そして防人歌収集と防人関係長歌三首の詠出は、理想的な政治を希求する家持が、別離を強いられて悲しむ防人たちの姿を民の苦しみとして解し、「民は国の根本である」とする『尚書』の思想を理解した上で行われたのであると結論する。

『日本靈異記』の歌謡

元國學院大學大学院特別研究生 岩井 護

『日本靈異記』（以下『靈異記』）は、弘仁年間（八一〇～二四）の成立とされる日本最初の仏教説話集である。原文は漢文体であるが、条末の「訓釈」と本文の「歌謡」とは、大方「万葉仮名」で書かれていて、奈良時代の国語資料ともなっている。

『靈異記』の「歌謡」は、上巻の第二話と第四話、および中巻の第二話に「短歌」が、中巻の第三十三話と下巻の第三十八話には、「童謡」と称する歌謡が見える。

それらのうちの、例えば上巻の第二話に見える短歌の、

古比波未那和我宇弊迹於知奴多万可支流……（興福寺本・原文）  
古非皮奈和我戸尔於知奴多万可妓苗……（高野本・原文）

とある部分について、これを上代特殊仮名遣で見ると、どちらも甲

類の「古(コ)」は正しく使われているものの、乙類では、興福寺本の「比(ヒ)」と「弊(ヘ)」とに誤りがある傍ら、高野本の「非(ヒ)」と「戸(ヘ)」とは正しく使われている。

一方、「表記」の面を見れば、興福寺本は万葉仮名の草体化が進んでいて、「於」や「奴」などは平仮名に近く、高野本では、「皮(波)」「ネ(弥)」「苗(留)」などの「略体仮名」が目立つ。

また、興福寺本の上巻第四話には、「伊可流可乃……三奈和数良礼女」とあるが、『上宮聖徳法王帝説』では、「伊加留我乃……彌奈和須良叡米」とあって『靈異記』の「礼(レ)」と『法王帝説』の「叡(エ)」とに異同があるほか、『補闕記』には、「斑鳩乃……御名忘也米」と見え、『伝略・下』では、「怒鹿之……御名者忘目」とあるなど、諸本や関連文献による表記の異同と、これに伴う語法の異同も見えてくる。

ここでは、『靈異記』の「歌謡」に用いられた「表記」について、諸本や関連文献との対照による異同を分析し、『靈異記』の「歌謡」における諸本の位置づけを探るものとする。

### 『源氏物語』における夕霧の人生儀礼

—籠りの空間としての二条東院—

山口大学大学院生

趙 暁燕

光源氏の息子夕霧は、少女巻で元服を迎える。当時、上流貴族の子弟には蔭位の制という優遇措置があり、元服後すぐに政治の世界へ参入するのが慣例であった。しかし、光源氏は夕霧に大学寮入学という進路を歩ませてゆく。本発表では、この元服から大学寮入学という一連の物語展開の中に、成人儀礼の持つ本来的な構造が組み込まれていること、すなわち聖なる時空での一時的な籠りと、その

籠りを契機として聖なる力が授与されてゆく様相について読み取ることになる。

夕霧の大学寮生活は、二条東院が舞台となる。注目すべきは、この生活が「籠る」という表現によって語られてゆく点である。少女巻には6例の「籠る」があり、そのうちの5例が夕霧の二条東院生活に関わって用いられている。物語は積極的に「籠る」という表現を夕霧に結び付けてきていると捉えてよい。ちなみにこの語には、隔離された時空に一定期間滞留し、聖なる力を獲得するという発想が認められる(『王朝語辞典』)。これは成人儀礼に通じるものでもある。文化人類学や民俗学の報告によれば、本来的な成人儀礼では、一時的に隔離された生活を送るプロセスがあるとされており、夕霧の二条東院生活は、これに相当すると考えられる。

なお、成人儀礼の隔離生活で重視されるのは、年長者による聖なる力の授与である。少女巻の文脈で、この役割を担うのは「まめやか」な「才深き師」となる。従来、夕霧の「まめ」については、葵の上や内大臣といった母方の血筋による継承と説かれてきたが、論者はこの件に関し、用例の初出状況から考えて「才深き師」の「まめ」を継承したものと捉えられるという説を提示しておきたい。夕霧は、元服を契機として父光源氏や母方といった血縁者集団から引き離され、「師」という血縁外の者から「まめ」と「才」という力を授与されるのである。夕霧の人生は、この後天的な力を軸として自立的に展開することになる。

### 内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の注釈内容

早稲田大学大学院生

カラーヌワット・タリン

鎌倉時代の代表的な『源氏物語』古注釈に『紫明抄』がある。



素寂が久明親王の命によりまとめたものだが、伝本の数が少ない上に、現存している完本は京都大学文学部本（角川書店版の底本）、そして本発表でとりあげる内閣文庫蔵三冊本の二本しかない。内閣文庫蔵三冊本の分量は京大本の半分にも及ばない程度であるため、本書は『紫明抄』の抄出本のようにも見えないが、本書には京大本ほかの『紫明抄』諸本にみえない独自の項目が含まれている。先行研究において、本書は内閣文庫蔵十冊本『紫明抄』の略本、あるいは『紫明抄』の初稿本的なものなどと言われてきたが、本発表では、従来とえられていなかった注記内容の特徴をもとに、内閣文庫三冊本を新たに位置づけてみたい。

まずは、『紫明抄』に先行すると考えられる『光源氏物語抄』の素寂説と内閣文庫蔵三冊本の注釈内容とを比較し、どちらが素寂の初期的な注釈といえるのかを検討する。次いで注目したのは、京大本ほかの『紫明抄』には見られない独自の注釈内容の中でも、『水原抄』『河海抄』そして『花鳥余情』と関わりのある注記である。特に、散逸した『水原抄』と関わる注記は、「水原」などと出典名を示す例と、『河海抄』所引の『水原抄』説に一致する例とがあり、ともに留意すべきであろう。さらに、『河海抄』『花鳥余情』の説と近似した内容も見られることから、これら後代の注釈書と本書との関係をも検討する必要がある。以上のように本発表では、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』について、『光源氏物語抄』との比較から素寂説の展開をとらえなおしつつ、『水原抄』『河海抄』『花鳥余情』と関わる注釈内容の検討などから、『紫明抄』としては際だった特色をもつ本書の新たな位置づけを試みる。

## 【研究発表／午後】

### 中上健次『奇蹟』

―タイチの救済―

中京大学大学院生 佐藤 綾佳

『奇蹟』は秋幸三部作と連続する作品と考える。『奇蹟』には、死後にトモノオジの幻覚に現れるはずのオリユウノオバが生前から現れ、居るはずのないこの二人が、タイチがダムに沈められた場所に居合わせるなどの曖昧さと、秋幸三部作の持つ現実的な緻密さが混在する。時間軸や登場人物の曖昧さはタイチの死の場面で際立つ。それは、タイチを如何に救済しようかという中上の葛藤の現れだったのではないか。

高貴で澱んだ血を持つ中本の一統のタイチは、一統の他の者が女遊びに明け暮れる中、幼くして極道となり殺人を犯す。このタイチに「真つ当になれ」と息子のヒデジという救いの手が差し伸べられた。ヒデジは生まれる朝オリユウノオバの夢で仏から託された赤子であったが、生後三ヶ月で死んでしまう。ここではタイチは救済されず、仏は新たな苦難をタイチに与える。タイチは路地総出で磯遊に行かせたのが仇となり、この日にタイチは路地から連れ去られる。中上は、路地が作った中本の一統の最後の者を路地の消滅と共に救済しようとしたが、その特異性ゆえ、タイチを救済するのは容易でない。そのためタイチの死に関わる場面で現実感を持たない夢幻的な世界を作り、曖昧さを利用して救済を果たそうとしたのではないか。

秋幸三部作と比較して、この作品の特徴を成すのは仏教的なイメージの頻出である。路地は蓮池を埋め立てた場所だ。実際には極楽とは言えない環境だが、路地の者は蓮華の台という自らの心に存在する極楽に住んでいる。また、路地にある夏芙蓉は架空の花だが、

芙蓉は蓮の異名のため蓮と考えてもよい。そして、中上がハチ鳥をモデルにしたとする夏芙蓉に群れる金色の小鳥を、仏教に出てくる金翅鳥と考えてもよいのではないか。中上は、こうした仏教のイメージを伏線として、最後にタイチをお釈迦様の掌に乗せ昇天させることで救済したのだ。

### 与謝野晶子「北備溪谷の秋」の旅と岡山

— 渡辺喜作順正高等女学校校長宛書簡他、「旅」と「旅先」にもたらされるもの —

就実短期大学准教授

加藤美奈子

与謝野晶子「北備溪谷の秋」(『街頭に送る』(昭和六年)所収)には、昭和四年十月、与謝野寛とともに招かれて岡山県北部、現在の高梁市周辺を訪れた旅程と所感が示されている。文学者の「旅」により「旅先」にもたらされるもの(書簡・揮毫・地方芸誌・郷土史・校史、文学碑等)は、時に「発見」され、足跡・作品を補完するものとして参照され、意義付けられる。一方、「旅先」の地域においても、しばしば(時に「観光資源」として)引用・言及されるものの、典拠の如何は敢えて問われることのないまま「語り伝え」られている例も少なくない。本発表では、晶子の「北備溪谷の秋」の「旅」が「旅先」である高梁地域にもたらした諸資料を示し、検討を加えたい。

「北備溪谷の秋」の晶子・寛の旅中詠は、「冬柏」(昭和五年一月)・『與謝野寛短歌全集』(昭和八年)に確認されるが、全集には所収されていない。「旅先」で揮毫された直筆資料として、宿泊先の旅館に軸・短冊が所蔵されている。「旅」の後、高梁で晶子を迎えた側の一人である渡辺喜作順正高等女学校校長に宛て

られた書簡(昭和五年二月十四日付)は、晶子の『女子作文新講』巻一(昭和四(五年))を教科書・副読本として採用することを依頼する内容の新出資料である。全文を掲げ考察を加える。

郷土史『豊永村誌』(昭和八年)は、「名勝」の一項目「満奇洞 一名槇の穴」で、「歌人と謝野夫婦」来訪に言及している。地方芸誌「備北文学」(昭和五年一月)は、「北備溪谷の秋」に「深切な案内役」として名前の見える「芳賀直次郎氏」の直話を載せている。いずれの資料にも旅中詠が掲載されているが、全集及び前掲資料未収録歌を含む。諸資料を比較し、短歌作品の所収状況・異同を示す。

「旅先」の資料が恐らくは多くそうであるように、右の諸資料も実見し難い現状にある。加えて、「旅先」である地域で見出された「もの」を、「どのように扱うか」について、苦慮せざるを得ない一面を併せ持つことを指摘し、教示を得たい。

### 弘前・秋田・山形所在の往来物資料についての一考察

— 目的と出版地域による分類からの検討 —

弘前大学教授

郡 千寿子

【主旨】往来物は、日本社会の近代化に関わる重要な資料群であり、生活規範確立に寄与するものだが、発掘調査や資料的価値など、その研究は十分にすすんでいない。本発表では、東北地域の図書館等に所蔵されている往来物資料調査に基づき、従来、教育史資料として活用されることの多かった往来物資料が、近世庶民教育や日本語史、地域や文化の研究資料としても有用性があることを検証したい。近世期にどういった種類の往来物が作成され、また利用されていた

のかを目的別に分類し、加えて、それぞれの資料の出版地域を特定整理し、出版地域別の所蔵状況についてまとめた結果を公表する。

【方法】東北地域のうち、弘前市立図書館、秋田県立図書館、酒田市立光丘文庫、山形県立博物館教育資料館所蔵の近世期版本往來物資料について、目的別と出版地域別に分類整理し、グラフ化して比較検討を試みた。

【結論】往來物資料の所蔵状況という特殊な面からの比較検討であり、ひとつの傾向を示すにすぎないと思われるが、それぞれの地域における共通点や相違点、また特性について考えてみた。目的別分類からは、どういった種類の往來物が作成され、利用されていたかを知る手がかりを得られた。出版地域別分類からは、内陸部(弘前・山形)と日本海域(秋田・酒田)とでは分布に差があるという結果が得られた。これは、近世期における日本海の海上交通(北前船)によって、陸路とは別に海路からの直接的な関西文化圏からの文化流入があったことを物語る傍証になるものと推測される。

### 饅頭屋本『節用集』二種の語彙について

—畜類門・草木門語彙を中心として—

駒澤大学教授

萩原 義雄

#### 【主旨】

室町時代の古辞書における標記語及び語註記の所載状況について、これまでに一語一語に照射する方法で「魚名」「しいら」「鱈」などの発表と古辞書全体における語の収載を把握する意味で『下學集』『節用集』『運歩色葉集』などの語彙全体に関わる事象を発表者はこれまで稽查してきた。

その古辞書中において刷版として公刊された饅頭屋本二種(初版

本と増刊本とす)について、同じ饅頭屋本であっても、語の増刊による相異が見られることは既に先賢により指摘され、発表者も再検証を試みて具体的にその内容を提示している。今般、この饅頭屋本『節用集』二種が如何なる先行古辞書の影響を承けているのかを端的に比較しつつ、明らかにしていくことにある。その収載全般における語は部門毎に見た時どのような結果が得られるのかと云った全貌は、もう少し先のことになるが、本発表では畜類門・草木門の二部門の語彙について詳細綿密に考察した結果を此処に報告する。

#### 【方法】

饅頭屋本『節用集』二種である国会図書館蔵・宮内庁書陵部蔵・早稲田大学図書館蔵の初版本と筑波大学図書館蔵(小汀利得旧蔵)の増刊本とを対照にし、これに増刊『下學集』と印度本系の橋本経亮本『節用集』の語を以て語の比較対照に加味することで、語の収載状況を拡張把握するための目安とした。さらに、語の成立と収載の先後状況を確認する意味から現行の国語辞書である小学館『日本国語大辞典』第二版と角川『古語大辞典』の意味・用例を指標にして顕著な特徴を有する語を適宜選択し、其の語が持つ特異性について分析を試みることにした。

#### 【結論】

室町時代以前の古辞書である三卷本『色葉字類抄』などから承けた畜類門の語「啄木鳥」などは、室町時代古辞書のなかで訓みの保持と変容の異りを見せている。室町時代において、収載する語と未収載にする語との境界線を引く証左となるのがこの饅頭屋本『節用集』と考えるからである。編者の代表者林宗二とその一族たちの人が成せることば選びの技術がここには展開している。それは、この時代におけるひとつの言語文化事象を示すものと云えよう。本辞書収載の語彙(凡そ七〇〇語)のなかから敢えて特定の語を選別しながら丹念に見据えていくことで、所載語の特徴を見定めることにより公家・武家そして商人と云った身分階層を超えての知的文化交

流の一端を掘り起こすことを予測しつつ、今発表では語の継承性について言及する。

## 会場施設へのご案内

- ・ 会場 宮崎観光ホテル
- ・ 住所 〒880-8512 宮崎県宮崎市松山 1-1-1
- ・ TEL 0985-27-1212



	タクシー	バス
宮崎空港より	約 15 分	18 分 "たまゆらの湯"下車で徒歩 5 分
JR 宮崎駅より	約 5 分	10 分 "橋通1丁目"下車で徒歩 10 分

※ 講演会会場・研究発表会会場（東館 3F・碧燿の間）、委員会会場（西館 10F・スカイホール）については、館内の案内板を御確認ください。